討論余話

東アジア世界史研究センター事務局長
飯尾　秀幸

今回の私どもの第2回の国際シンポジウムを、報告・討論ともにとても有意義なものにしていただいたことに対して、事務局から報告者ならびに参加者に対して感謝の意を表したい。昨年の第1回シンポジウムにおいて、私たち東アジア世界史研究センターが展開すべき論点、および研究の方向性が明らかとなった。その方向性の一つは、東アジアの各地域における遣唐留学生（本プロジェクトでは、この語を、各地域から入唐した人々を指すものとして統一して使用する）個々の具体的な事例の発掘（それは日本のみでなく、とくに朝鮮半島からの遣唐留学生が重要になる）、およびその背景にある、それぞれの国内事情（王権ならびに政治史）との関連の追究であり、いま一つは、古代における東アジア世界史という概念の可能性への問い、ならびにその概念の有効性を遣唐留学生から再構築する試みという追究であった。

この二方面を追究すべく企画したのが、今回の国際シンポジウム「古代東アジア世界と日本・新羅の留学生」である。まず、唐が日本という国号を認識した時期（葉國良報告）、唐の外国人に対する対応（王建新報告）という、東アジア世界の中心であった中国王朝の外国に対する「意識」の問題が提起された。また、大平聡氏の吉備真備を中心とした日本からの遣唐留学生の具体的な事例についての研究報告、および権悳永氏の新羅からの遣唐留学生についての研究報告は、本プロジェクトが追究する二つの方向性のうちの前者について、さらなる具体化を進めていただいた。さらに、大平報告の、ともに遣唐留学生を送り出した日本と新羅との間の直接的な交流をさらに解明することが必要であるとの指摘と、権報告の、朝鮮半島において先進の外国文化の導入を示す語とされる「西学」という概念を、古代の新羅における唐文化の導入にも適用して、古代の文化導入のあり方を前近代史全体のなかで捉えようとし、さらにこの「西学」概念を日本にも、東アジア諸地域にも適用できないかといった提案は、我々の二つの方向性の後者について、これに積極的に応えようとするものであった。

討論のなかで、大平氏は権氏の提案する「西学」概念について、「西学」概念の適用によって見えてくるものもあれば、見えなくなるものもあるとしつつ、遣唐留学生の問題に対しては見えなくなるものが多くなるのではないかとして、その適用に否定的な見解を示された。いうまでもなく、すべてが見える概念というものは、何も見えない概念と同義である。そのなかで、ある概念を導入しようとする行為においては、その有効性こそが問題となる。第1回のシンポジウムの討論で展開された問題はその点にあった。そこでも議論されたように西嶋定生氏は世界史理解の

重要性を指摘し、東アジア世界の具体的なあり方として、冊封体制なる概念を提起した。それは金印・王号の授受などを通じて、中国を中心（原点）として東アジアの各地域が、中国という原点から延びる幾筋かの「放射線」上に中央と周縁とが一対一でつなげられるという構造であった。この構造から見れば、日本・新羅の遣唐留学生の動きは、この「放射線」上の往復移動である。冊封体制に対する様々な批判が提起されている今日、遣唐留学生という切り口で東アジア世界史概念の再構成を試みる私たちの課題からすれば、この「放射線」論を再考する必要があることになる。その際に上に挙げた大平・権両氏の論点は、この課題と積極的に向き合っているといえよう。

これらの論点に即して一つの試論を述べるとすれば、以下のようになる。新羅・日本両国が、唐の文化をそれぞれ国内に導入しようとする政治的目標を同じく持っていたという意味で、「西学」概念を両国に適用することができる。ただそれは、遣唐留学生の「放射線」上の往復としてのみで捉えるのではなく、ともに同じ目的を持ったもの同士である新羅・日本両国間の直接的な交流を包含するという、すなわち、拡大した「西学」概念としてこれを適用したらどうだろうかという意味においてである。「放射線」上の往復で唐から各地域に直接もたらされる文物もある。しかしそのなかには、どのように導入してよいのか、たとえば唐の文化・制度・宗教・思想などの本来もっている意味は何なのか、これら即座に理解できないものが存在していた。とくに日本においては、そうしたものが多く存在していたのではないか。とすれば、当時において、同じ「西学」の先達である新羅の唐文化の導入・理解の仕方に学ぶことは、日本が新羅との直接的な交流を求める動機となる。それは支配という構造をもって世界の一体化が進められた近代世界の成立の動きのなかで、近代化という西欧の文化を学ぶ（「西学」）アジア諸地域において、アジア地域間の相互交流（拡大した「西学」）が活発となるという現象も類推されよう。

この拡大した「西学」は、東アジアの「放物線」上の個別なつながりである「西学」と対比され、東アジアにおいて唐を中心とした同心円を想定し、その同心円の「円周」上にある新羅、日本などの間の交流・移動、すなわちともに遣唐留学生を出す側の間（「東夷」間）の交通を（これを担った者も留学生として）問い直す概念として理解されることになる。したがって、中国を中心として各地域がつながる「放物線」上の交通と、中国を原点にする同心円の「円周」上における交通という二構造の相互連関、とくに後者についての見直しと具体化に、新たな東アジア世界史像の有効性を見出す可能性があるのではないか。それは、王報告、ならびに討論において鈴木靖民氏によって概括された、唐という世界帝国、コスモポリタンとも評される唐の人々の存在に対して、それでも独自性をもって展開されていたと考える東アジア世界史という概念の提起と、その有効性の問題への追究につながるものと考えたい。

以上は、各2回の公開講座・シンポジウムを通して明らかになった方向性とその具体化の提言に関して、本プロジェクト事務局が、これら諸研究を振り返り、今後の研究活動のためにあくまでも問題を整理した試論に過ぎない。ただ、これらを追究するための作業として、すでに私たちは、隋・唐、朝鮮三国・新羅、渤海、日本の交流年表とそれに関連する史料集を鋭意作成中であることもここに付け加えておきたい。これらも含めて、多くの方々の忌憚のないご意見、ご批判を承りたい。